



左より佐藤・堺・山下の各氏

入賞者の横顔

土木学会編集部

堺 幸七君

日頃よく考えていたテーマだったんでタイミングは良かったのですが……と語る堺さんは仕事が設計関係で夜まで忙しく、論文の締切り間際には2日ほど徹夜したという。自分なりに精一杯やったつもりだったが、具体的な内容を盛り込むには裏付けが不足で、どうしても抽象論に走ってしまった……というのが一席入賞者の率直な反省であった。

社内では純情派で通り真面目な態度を注目されているこの人の趣味はヨットだという。人命を預かる責任の重いスポーツのひとつだ。九大時代よく博多湾に青春の汗を流し、ローマまではオリンピックをねらって選考の最後まで残ったというくらいだから趣味の領域を越えていたに違いない。きびしいが頼りになる男というのがヨット仲間の定評であり、また女の子にも相当もてると聞く。

海の好きな若いロマンチストの口から海洋の資源開発や砂漠の開発は、などとやられると全くだという気持ちになってしまう。酒は強いが決して乱れず酔うとよく夢のような空想を相手に投げかけるとのこと、いずれは海外へ出て自分の力をためしたい意慾も十分あるらしい。

現実の仕事面をいかに将来の夢に結びつけるかが堺さんの今後の大きな課題とみるがバリバリやってほしい。独身、しかしゴールインは間近そうである。

昭和34年九州大学工学部土木工学科卒業。同年財団法人建設技術研究所入所、技術部に移り今日に至る。昭和10年7月9日生れ。本籍福岡県。

山下 敢一君

将来は造船技師にという希望が小さい頃から横浜に住んだ山下さんの夢だったようだ。ところが大学入学当時は最悪の造船不景気……これには全くクサったらしい。かなり迷って土木へ進み専論には合成術の設計を選びそして就職は石油会社とやや変わったコースを歩く。36年に帝国石油から今の会社へ移り、長岡に居をかまえることになる。石油と土木では直接関係のない仕事のようにだが、原油採取施設、タンク、パイプラインなどの設計、海中での人工島工事など、並べられてみると石油産業が要求する技術者は非常に広い知識が必要のようだ。新しい職域のひとつといえそうである。

学生時代から理論家であり、学生運動にも熱心だったと聞くこの人は、実に沢山の本を読んでいるようである。毎月の本代のことで女房と良くもめますと笑う。論説の類が好きという。長く深い読書の素地が問題意識をかり立て締切りギリギリに書上げたというが、内容的には不満だらけだそう。明日からでも付け加えてゆかねばならない問題だし、今後も突詰めて考えてゆきたいとキッパリ言い切る。全般を見渡せる技術者として広く勉強し大工事の中に進んで飛込んでゆきたい、これが山下さんの抱負である。越えるべき壁は厚いが今後の努力を待ちたい。30才、3つの男児がある。

昭和34年東北大学工学部土木工学科卒業。帝国石油KKを経て37年石油資源開発KKに移り長岡鉱業所勤務。昭和9年5月16日生れ。本籍静岡県。

佐藤 吉彦君

今回の懸賞論文は3年ほど前「土木工学とは何か」なる論説を学会誌上に発表し、各方面にいろいろな問題を投げた佐藤さんにとって、割合に論じやすい課題だったのではあるまいか。大学院時代から学会の文献調査委員会を皮切りに数多くの委員会に引張り出され、優れた分析力と行動力を買われて、もっぱら幹事役として小マメに飛び回っているこの人は、かなりのウルサ型？と見られているようである。生真面目な性格が中途半端な妥協を許さないのだろう。鉄道技研では軌道構造の研究に取組むとともに、やがては鉄道の将来を開くような仕事をしてみたいという。個々の複雑な条件を組合わせた国土計画のような仕事も土木の最終的な面という意味で手がけたいことの一つだそうである。優秀な人がどんどん入ってくるような魅力ある世界を築くために蔭の努力を今後も続けたいと抱負を語りながら、学会は学問の発展をはかることは当然だが、これからはもっと土木技術者全体の共通問題を追求する方向にも目を向けよと主張する。人類に対する義務感、使命感を植えつけるような学校教育をしてほしいと先生方への注文も忘れない。いずれは小説なども書いてみたいという佐藤さんであるが、豊富な人生経験の蓄積がつぎの飛躍台のポイントとなるだろう。

岩手県出身、31才、一児の父。

昭和30年早大土木工学科卒業。32年東大大学院修士課程修了。35年国鉄入社、36年鉄研勤務となり今日に至る。昭和8年3月30日生れ。本籍岩手県。工博。